

1, 研究テーマ

「生徒一人ひとりが、友と関わり合いながら運動の技能を高め、運動の楽しさを深めるための授業づくりはどうあったらよいか」

～生徒同士のコミュニケーション活動（学び合い）に視点を当てて～

2, 研究課題

体育・保健体育における「確かな学力」を以下のように考えた。

仲間と関わり合いながら、アドバイスし合ったり、励まし合ったりする活動を通して、運動する喜びや楽しさを味わい、自信をつけて挑戦したり、自ら進んで練習したりすることができる。

仲間や自己の運動への取り組みを振り返り、仲間の良さや自己の課題に気づくことができる。

その運動の練習方法を工夫したり、動きのイメージをつくったりしながら、運動の動きを高めていくことができる。

そして、この「確かな学力」を育むための授業作りとして、以下の4つを研究課題として研究を進めてきた。

コミュニケーション活動の取り入れ方

グルーピングのあり方（男女（仲間）の関わらせ方）

学び合いを生かして、課題を成立させるための工夫

グループ（チーム、個人）の課題追究場面での教師の出

3, 指導の実際

期 日 平成19年11月7日（水）

学校名 小布施中学校

単元名 「つないで攻めるバレーボール」

授業学級 3年3組（男子16名 女子16名 計32名）

授業者 片井 千秋 教諭

研究の重点

1学期に行った陸上競技では、ペアもしくはトリオの学習形態を中心にして学習を進めることにより、互いに助言し合ったり、ハードル走のフォームを分析し合ったりするといった生徒の姿が見られた。

2学期に入りバレーボールの単元に入ったが、小布施中学校では、バレーボールクラスマッチを目指した学習展開であったため、苦手な生徒にとっては、自分の失敗がチームの勝敗に直接かかわるといった精神的負担が強いられる可能性が予想された。また、男女混合チームでの学習となると技能差をどうカバーし合っていくかという点も心配された。

そこで、本単元（バレーボール）では、グループの支え合いを中心に、コミュニケーション活動を多く取り入れながら、単元展開を仕組むこととした。また、バレーボ

ールは、体力差が大きい傾向にある男女混合でも、ルールの工夫やフォーメーション・作戦をしっかりと考えさせることで、体力差をカバーし合って競技する楽しさをより多く享受できると考えた。

そして、「確かな学力」を育むために、本単元では教師の手だてとして、以下の4点を中心に授業作りを行った。

学習を進めていく上で、その運動に寄せる生徒の願いを共有できる場の設定

グループ学習等で、仲間と確かめ合い・見合い・振り返る場の設定

学習カードでの教師のコメントや全体の場合・チーム練習の場合において、動きの紹介やアドバイスなどをして、動きのイメージを鮮明にしていく。

運動の一つ一つの動きをつないで一連の動きの流れを作っていけるような練習方法を紹介したり、学習カード等を通してアドバイスしたりしていく。

4、この事例から明らかになったこと

まず、本単元では、学級で目指すバレーボールを導入段階でしっかり話し合い共有することができていたため、仲間同士の学び合いにつながることもできた。

また、本時の授業では、仲間の動きを見合う場面を設定し、そのグループの動きについて、全体で分析し合うといったコミュニケーション活動を行うことで、自分たちのチームの課題をより明確にすることができたグループもみられた。

グループごとの練習やゲームの場面では、仲間の動きをみんなで確認し合い、ミスをした場合もアドバイスや励ましの声かけをし、みんなが楽しめる雰囲気を作られていた。そのため、バレーボールを苦手としていた生徒も、自信をもって積極的に取り組む姿がみられた。

以上のことから、自分に自信を持って自ら進んで運動するといった、体育・保体における確かな学力の一つが育まれたといえるのではないだろうか。

5、来年度への課題

それぞれのグループや個人の課題追究の場をどう深めるか。課題追究の場面で教師の出や授業展開、教材化の工夫が、そのグループの必要としているものとならなければ、課題追究が深まらない。その結果として課題解決力がつかない。この課題解決力も体育・保体における確かな学力の一つでもある。

(体育・保健体育委員長 涌井 孝治)